

13日目は9月4日(土)、前回到達地点であり、吉田宿はずれのJR飯田線下地駅を6時半にスタート、晴天。猛暑が続き、朝から暑い、熱中症対策の新兵器を準備、FMラジオは受信快調、アラウンド80sの特集で聞いたことはあるものの題名を知らない軽快な曲が連続する。次の宿場の御油まで10Km程、ガイドブックでは53次の名所旧跡の無いところを歩くことになる。とは言うものの、何か面白いものはないかときよろきよろしながら歩く。小さな川(豊川放水路)があり小魚が盛んにジャンプしていて、その上をカモメの様な白い鳥が輪を書いて飛んでいる。川面に朝日が反射して写真はうまく取れない。“fish is jumping”のサマータイムの歌詞を思い出す、まだ早朝、サマータイムのけだるい雰囲気とはマッチしない。

#### 子だか橋

次に目にとまったのは「子だか橋」の石碑、どんな橋かと説明板の前で足を止めると、「およそ千年前、菟足(うたり)神社に人身御供があり、春の大祭の初日にこの街道を通る若い女性を生贄にする習慣があった、或る年、村人の前を、故郷の祭りと父母に会う楽しさを胸に、足早に通るかかり橋の上に来た若い女性を見れば我が子、苦しんだが神の威光に逆らえず、”子だかやむをえん”と生贄にした、それからこの橋を「子だか橋」と呼ぶ様になったと言う、現在では菟足神社は12羽の雀を供えている」と書かれている。「神も仏もないのか」とその親は思ったのだろうか。

その石碑の先に菟足神社があり、この神社には三つの史跡があると書かれていて、①1691年に立てた石の鳥居、②1804年奉納の石灯籠、③弁慶が植えた松、とある。大きな石の鳥居は現代のコンクリート製の鳥居に負けず立派だが、写真は生憎の逆光で真っ黒、弁慶の松は何代目かで、見たところ樹齢10年にもならない若い松だった。「うたり」との言葉からアイヌと関係でもあるのかと思い、インターネットで調べると菟上足尼命(うながみ すくねのみこと)が祭られているとのこと、その祭神の名を縮めて菟足、7世紀建立の古い神社。

#### 迦土具神社

次に足を止めたのは「迦土具神社」、一体どう読むのか、その意味は、と気になったもの。これは「かぐつち」と読むのだそうで、いざなぎ・いざなみが国を作り、神々を産んだ時の、最後に産んだ神が迦土具神(かぐつちのかみ)で、火の神とのこと、勉強になりました。

神話も歴史の一コマ、高校の時に世界史をとり日本史をとらなかった為(言い訳がましい)、本当に日本史を知らないことが恥ずかしい、奈良に閉じこもったら歴史愛好家にでもなって古墳発掘のボランティアでしようか等と考える。

子だか橋の碑



迦土具神社



## 東海道と日陰

お江戸日本橋を出て以来、午前中は殆ど道路の左側を歩いてきた、理由は左側が日陰になるからである。ところが今日の日陰は道路の右側となり、従って右側を歩いている。 ということは、今まで緩やかに南下していた旧東海道は、豊橋付近を底として北上していることになる。 地図を見れば直ぐ気が付くことだが、感覚としてそれを知ったことに何となく得をした気分となる。

未舗装の旧東海道

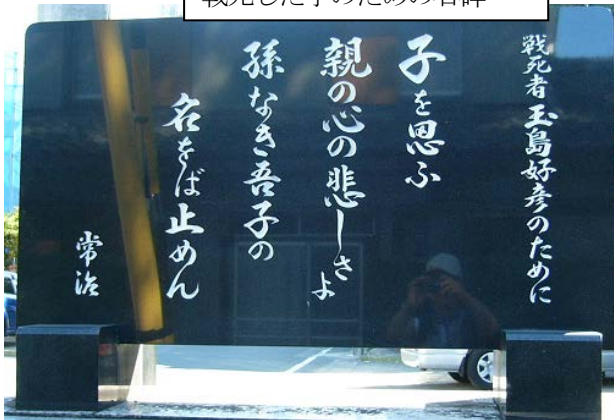


行政的には、豊橋市から豊川市となる。 道は国道1号線と合流したり、離れて町中を通ったり、或いは国道1号線の側道となっている舗装も何もされていない草の生えた田んぼの脇道となったりする。 山の中は別として、平地で旧東海道の未舗装は初めて。 田んぼには稲が実っているが、まだ緑色で、黄金の実りの秋は1ヵ月ほど先か。

左の写真の遠くに見える丘陵の先が次の宿場。10Km は長い。

## 子を思う碑

戦死した子のための石碑



途中で休憩した神社で、その一角に比較的新しい黒御影石の立派な石碑を見て思わず写真。 100歳に近い夫婦が建立したもので、「戦死者玉島好彦のために — 子を思ふ 親の心の悲しさよ 孫なき吾子の 名をば止めん」とある。

60年たっても結婚もせずに戦死した子の無念が忘れられず、自分達が亡くなったらこの戦死した子を記憶している人がいなくなる、との思いでこの石碑を建てたであろう両親の気持ちを考え、涙が出る。

## 御油宿 35番目

御油宿場のはずれの大灯籠



どんな長い道でも歩いていけばいずれたどり着く、「秋葉三尺坊大権現道」と「国幣小社砥鹿神社道」の道標と大きな石灯籠を見つけて、次の宿場である御油到着を知る。

御油は五井とも書き、五井橋を渡ると五位宿となる。 御油宿には小さな宿場町で、町並みは古いものの、本陣や旅籠などの建物は残っておらず、跡を示す碑と説明板のみ。 町の一角に、「ベルツ水で知られるベルツ博士と妻ハナ」の碑がある。 ベルツ水とは何なのか知らなかったのでインターネットで調べると明治時代にベルツ博士が作った手の肌荒れ用の化粧水で、顔に使うものではなく、現代でも販売されているらしい。 そのベルツ夫人ハナの父親の生家が御油で、その跡地に説明板が立てられている。



御油宿の街灯



御油宿で「凝ってはる」ものは街灯のカバー。松並木の松のシルエットをデザインしたもの。この街灯が町の至るところにあり、夜にその灯りの下を散歩するのはロマンチックかもしれない。この街灯の形で、子供の頃、家にあった幻灯機を思い出した。手でリールを動かしながら1枚1枚見ていくもので、TVの無い時代、白黒のフィルム、確かサザエさんの漫画があった気がする。

### 御油の松並木

宿場のはずれから国の天然記念物となっている「御油の松並木」が600mほど続く。

御油の松並木



ホイールカバーの落とし物



御油の松並木の松は大木が多い。その松並木を歩いていると、松ボックリに混じって所々セミの死骸が転がっている、確かにクマゼミの鳴き声は無く、遠くでアブラセミの鳴く声と時々ツクツクボウシの鳴き声。

セミの世界では完全に秋になっているのに・・・。

松の切り株に自動車のホイールカバーが置いてあった。この松並木で弥次さん喜多さんは狐に化かされたそうで、現代の狐は車を化かしてホイールカバーを落とさせるのか。

御油の十王堂



古い家があり、軒下を借りて一休み、その家を良く見ると十王堂と書かれた額があり、十王とは冥府で天国行きか地獄行きかを定める10人の裁判官の事を云い、最も有名な閻魔大王は5番目。建物の中は暗くて見えないが、その10人の大王の絵でも飾ってあるのだろう。



赤坂宿 36 番目

次の宿場の赤坂との距離は1.7Kmと近く、松並木を過ぎると直ぐに赤坂宿となる。赤坂宿の入り口に関川神社があり、芭蕉の句碑「夏の月 御油より出でて 赤坂や」がある。この句は両宿場があまりにも近く、同じ月が照らしている様を詠んだものとのこと。

関川神社町内1の大きい楠木



芭蕉句碑 夏の月



長福寺の町内1古いヤマザクラ



赤坂宿の関川神社には大木があり、町内1の大きさで、幹周 8.2m 樹高 28m 樹齢 推定 800年以上の大楠木、横の広がりが大きく、写真に入りきらない。赤坂宿の次の寺、長福寺にはヤマザクラ、樹齢 300年、幹周 3.3m、これも町内1の大きな桜の古木。

世界1の大木に興味のあるMさんに町内1はスケールが小さ過ぎるかもしれませんがご勘弁を。

浄泉寺の百観音



次の寺は浄泉寺、百観音が有名とのこととで参詣。因みに、宗教心の薄い私の参詣とは目で見て確かめて写真を撮ること。

寺の壁沿いに観音様の石像が並んでいて壮観、最初は全て違う表情、仕草と思っていたが、よく観察すると数種類のパターンしかないことが分かる。



### 赤坂宿の蘇鉄

この浄泉寺のもう一つの名物は大蘇鉄。 広重の浮世絵にも書かれた古いもので、推定樹齢270年、樹高3m、幹周4.6m、かつては旅籠の庭に植えられていたが、明治になってこの寺に移植されたもの。

浄泉寺の大蘇鉄



広重、赤坂の旅籠の蘇鉄



この御油や赤坂は「√ 御油や赤坂吉田がなけりや、親に勘当うけやせぬ」と歌われた東海道屈指の歓楽地だったそう。 又、赤坂には、1716年建築の、東海道上で唯一現在も営業している旅籠「大橋屋」があり、芭蕉が泊まった部屋もあるそうで、現役の旅籠なので中の見学は出来ず外観の写真のみ。 窓の格子も古いが、2階の屋根の微妙な曲がり具合が年輪を感じさせる。

東海道唯一の現役の旅籠、大橋屋



## 無料休憩所、よらまいかん



赤坂宿の外れに無料休憩所「よらまいかん」があり、そこで大休憩、ここまで既にペットボトル 2 本のスポーツ飲料、K さんに教えてもらって 2 倍に薄めたもの、を飲んでる。時刻は 10 時を過ぎており、多少空腹感もあって、おやつグラノーラバーを食べる。

## 熱中症対策

ここで、新兵器の使用報告。熱中症対策の新兵器とは、冷え冷えマフラー商品名「マジクール」、広告では水を含ませただけで冷たさを長時間持続するすぐれもの。水を含ませたスポンジを首に巻くようなものだが、スポンジと異なり保水力が強く、水を含むと手では絞れず、少しずつ、少しずつ、水が染み出てくる。現実使用してみると、「冷たさを長時間持続」は唄い文句どおりでウソではない。ところが、ところがである。このマジクールを首に巻きつけ歩いていると、万有引力の法則でそのマジクールが首元にズリ落ちてくる、そこには T シャツの首の部分があり、T シャツとマジクールが接触し、マジクールの水分が T シャツに染み込んできて、T シャツは濡れた状態となる。その結果、上半分は常に濡れた T シャツを何時間も着ていることになり、多少の不快感がある。熱中症になるよりはましか。

## 磯丸みほとけ歌碑

磯丸みほとけの歌碑

小さな観音像



赤坂から次の宿場の藤川までは約 9Km、気合を入れて再出発。

1 時間ほど歩くと、道路沿いに「磯丸みほとけ歌碑」の柱と小さな観音像がある。どんな歌碑かと足を止めたが、歌碑そのものは字が崩れてまったく読めない。インターネットで調べると、磯丸は江戸時代の歌人、観音堂の庵主が供養の為に磯丸に依頼した歌碑、しかし歌そのものは分からなかった。

道は国道 1 号線と合流し、遮るものは何もない炎天下、排気ガスを吸いながら歩くことになる。アイスクリームでも食べたいと考えていると地図上ではコンビニ、しかし着いたところ既に廃業、ガソリンスタンドとコンビニは地図にあっても現実には無いことが多く、激しい市場競争の渦中にあることが分かる。

## 本宿と東海道ルネッサンス

豊川市から岡崎市に入り、「自然と歴史を育てるまち 本宿」の石碑があつて、更に歩くと、「右国道 1 号、左東海道」の道路標識と「東海道ルネッサンス」の看板がある。東海道ルネッサンスとは初めて目にする言葉なのでインターネットで調べると「東海道ルネッサンスは、21 世紀の幕開けとともに東海道の果たしてきた役割を再発見し、国・県・東海道沿線自治体と市民が連携して、人が主役の豊かなみちづくり・まちづくりを進めていくものです」とあり、旧建設省が主導して東海道沿線の各地方自治体が行っている事業とのこと、既にその東海道を 2/3 程歩いているのに知らなかった。

確かにこのあたりの道は綺麗に整備されている。道路標識に従い、左へ曲がって本宿へ、本宿は赤坂宿と藤川宿の中間地点にある間の宿で、往時、旅人が休憩する茶屋が多くあったところ。



### 近藤勇首塚

まずは法蔵寺に寄り道、境内に家康が手習いをした紙をかけた松という御草紙掛があり、更に寺内の山を登ると近藤勇の首塚がある。ここは三河、家康は分かるが、何でこんなところに近藤勇の首塚があるかと言うと、京都でさらされた首を同志が盗みここに葬ったとのこと、しかし首は更に盗まれて今は行先不明。

御草紙掛松、但し代々受け継がれた松で  
現在のものは平成 18 年植樹の 4 代目



近藤勇首塚



土壁の鮮やかな、見事な長屋門を持つ旧家跡があり写真、医者宇都野家の跡とのこと。

土壁の長屋門



やっと見つけた「お食事処」で昼食休憩、ミソカツ定食 900 円なり。名古屋のやや甘くて濃いミソのタレはまあまあの味。氷入りお茶の湯呑を出されてあまりにも美味しく、グラスでのお代わりを注文、お茶の追加はタダ。

山中八幡宮の鳥居と大楠木



東海道ルネッサンスで綺麗な本宿を抜け、再び「遮るものは何もない炎天下、排気ガス」の国道 1 号線を 30 分ほど歩き、側道の民家の並ぶ街道を 30 分程歩いて、又、国道 1 号線に戻ると左手のこんもりとした山と赤い鳥居の山中八幡宮が見え、その中に、三河一向一揆の戦いで逃げた家康が隠れた洞窟があるので寄り道。

### 山中八幡宮

鳥居の後の樹齢 650 年、根回り 14m の大楠が「二股に分かれたご神木」と書かれていて、市指定の天然記念物、今日は市町村レベルの大木に巡り合う日らしい。



家康が隠れた洞窟は「鳩が窟」と呼ばれ、洞窟から白鳩が2羽飛び立ったので追っての兵は「人のいるところに鳩などいるわけではない」と言って通り過ぎ、家康は難を逃れたとのこと。家康は逃げ隠れたとか、危うく難をのがれた、との逸話が多く、だからこそ生き長らえたわけだが、英雄には程遠いイメージを抱いてしまう。山中八幡宮に入ったものの、急な石段の続く山道で、先が見えず、しかも案内板はなく、もちろん猛暑の真昼間に観光客も案内人もおらず、石段を登ったりおりたりする気力もわかず、洞窟探しはギブアップして東海道に戻る。

#### 藤川宿 37 番目

行く手に藤川宿ののぼりが見え、やっと次の宿場に着き、1号線と分かれて藤川宿にはいる。

藤川宿は小さな宿場で、本陣や旅籠は残っておらず、跡を示す標識や説明板のみ。

資料館があったので、見学しようと思い、鍵のかかかっていない戸を開けると照明は消えていて暗くて無人、何か悪いことをしている様な気になり、入館は断念。

面白い建物を見つけて写真、生憎と昭和の建築物で日本人形の製作・販売店、但し木造建築物として賞を取った建物との由。



#### むらさき麦

藤川宿のはずれに十王堂があり、その庭隅に芭蕉の句碑、「ここも三河むらさき麦のかきつばた」。江戸時代にはむらさき麦があったとのことで、赤米や黒米があるのでむらさき麦があっても不思議はないが、最近地元の農業試験場でむらさき麦の栽培に成功し、復活したとのこと。どんな麦かと気になり、インターネットで調べたところ綺麗な紫色の写真があり、食用ではなく、観賞用とのこと。

芭蕉句碑  
ここも三河



むらさき麦



きらみち道標



宿場を出たところで道は二又に分かれ、左には「きらみち」の標識、吉良上野介や吉良の仁吉の吉良はこの辺なのかと興味をそそられるが、今回は右へ東海道。



藤川松並木



綺麗な松並木が保存された1Km程の藤川の松並木の中を歩いていく。御油の松並木は自動車も通れるが人優先の感じであったのに対し、藤川松並木は自動車優先を感じる。

藤川の松並木を通り過ぎると岡崎の市街地となり、雰囲気は一変してごく普通の町中の道路となる。その町中を歩いて名鉄美合駅に16時に到着。

13日目は5万歩で約30Km、本日の飲んだペットボトルは5本。靴紐がきつかったらしく、足にマメができ最後はヨタヨタ、熱中症対策はうまくいったのに足をすくわれてしまった。

今回も東京駅八重洲口を深夜11時に出る夜行バスに乗り、朝の5時に豊橋着、6時半に下地駅からスタート、帰りは美合駅から名鉄で名古屋、名古屋17時半発の高速バスに乗り新宿に23時帰着。

次回は 岡崎 -> 知立 -> 鳴海 -> 宮

13日目

